

令和7年度（第2回）堺市依存症対策推進懇話会 議事録（要旨）

1. 日時 令和8年3月25日（水）14時00分～16時00分
2. 場所 堺市役所本館6階 A・B会議室
3. 出席（構成員氏名・敬称略）

（座長）野田哲朗	（職務代理）佐古恵利子		
伊東弘嗣	遠藤晃治	小野史絵	木原万樹子
高野善博	ソウマ	滝口直子	はま
寺井修也	森美緒	綿野初美	
4. 事務局 堺市健康福祉局健康部
精神保健課（安岡 山根 鈴木 木村）
こころの健康センター（中西 正徳）
5. 会議次第
 - (1) 開会
 - (2) 案件・報告
 - ① 令和7年度依存症事業等の報告【資料1】
 - ② お酒、くすり、ギャンブル等、インターネット・ゲームに関する意識行動調査（第1稿）について【資料2】
 - ③ 堺市依存症地域支援計画（第2次）策定スケジュールについて【資料3】
6. 議事等の内容
 - 5 (2) 案件①②③の報告を行った
7. 発言要旨
 - 案件②お酒、くすり、ギャンブル等、インターネット・ゲームに関する意識行動調査（第1稿）について【資料2】

調査概要に関して

【野田座長】

回答率は、今回は低いとのことだが、前回は新型コロナウイルス感染症の中での回答で、その時の方が高い状況。アンケート調査は、実際は低い状況なのか。

（事務局）

調査を委託している業者からは、このようなセンシティブなアンケート調査で、30%近い回答は決して低いものではないとの見解をいただいている。

お酒についての調査結果からの意見

【滝口構成員】

問 8 (1) の「お酒をのまない人」と「お酒をのまない (やめた) 人」の理由は、主旨が違いため別で集計した方が良かったのではないか。

(事務局) 分けての集計は、今回の回答方法では難しいです。

【高野構成員】

保健センター、保健所での相談の状況や、医療現場からの見解として、この統計結果と、臨床の印象と一致している。アルコール依存は「家族のみ相談」から「本人来所」へ変化がみられる。ブラックアウトが治療契機になるケースが増加している。これは、世帯構成 (家族の有無) とブラックアウトの気づきがある割合が高いのも、現場感覚と一致する。このお酒の調査結果は、治療現場の状況の裏付けになっている。

【野田座長】

女性の飲酒は増えてきている傾向はあるか、実感として男性と女性の割合は、3 : 1 くらいに感じている。

くすりについての調査結果からの意見

【伊東構成員】

問 14 のたばこの調査結果、R7 と R2 が重複している。

(事務局)

添付をどちらも R7 データとしていました。修正します。

【野田座長】

治療の現場では、処方薬は規制などで手に入りづらくなったのか、処方薬依存は、激減している。アルコール依存は、昔は家族が相談と多かったが、今は情報が豊かになり、ご本人が受診される割合が増えている。薬物は、家族からの相談のニーズが多く、ご本人が望んで相談に来られることは少ない。

【寺井構成員】

薬物使用の理由で、「快感・興奮を得るため」「元気を出すため」は、前回調査から割合は減少している。何を指しているかはわからないが、興奮作用のある覚醒剤系の使用は減少して、大麻を使用している人が回答しているか、という印象がある。

海外から輸入しているケースもある。処方薬依存は減っている。市販薬が増えている。ダルクにも時々電話相談あるが、来られる方は少ない。処方薬や市販薬依存の人は、自宅にこもりがちの人とか、人間関係が希薄な人が多い印象を受ける。

【野田座長】

販薬、処方薬の乱用は、若年層は咳止めのコデインなど使用しているが、正直に回答してくれないので、表面化しにくいし、結果にも反映されにくいのではないか。

【佐古職務代理】

薬物を初めて使用した人が、前回調査、今回調査とどちらも、20 歳未満が半数以上の割合である。未成年への薬物への介入が大事であることを再確認できた。

また、人づきあいのために使用しているという回答は、どこかの仲間に所属したいという寂しさを緩和する

ための使用ということもあるのでは。寂しさ、孤立ということに対する介入も必要かと感じた。

処方薬・市販薬は家族が問題に気づくことが多く、本人のアンケートでは実態が出にくい部分もある。

【寺井構成員】

データを見ると、覚醒剤より大麻に移っている印象。処方薬乱用は減り、市販薬が増えている。

市販薬ユーザーは、家から出られず、支援機関につながりにくい。

【野田座長】

若い女性の市販薬乱用は全国的に多いが、この調査では確認できない。

ギャンブル等についての調査結果からの意見

【滝口構成員】

ネットを使用した海外のギャンブルのサイトは、アクセス数を確認することができる。報道などで、オンラインギャンブルなどの取り締まりの報道があったときはアクセス数が減少したが、今は元に戻っており、一時的な現象にとどまっている。

ギャンブルに使用した金額の質問だが、ギャンブル産業は、少数の人が多額のお金を使って成り立っている産業と言われおり、今回の調査結果からでも、SOGS8 点以上・未満でお金の使い方の違いがあることが確認できる。

海外のオンラインギャンブルの決裁代行業者のビッグデータ解析も進んでおり、実際に少数の人が多額のお金を使っていることがわかってきている。その少数の人への対策も必要であり、そのことも念頭においていただければ。

【伊東構成員】

ギャンブル参加の購入方法で、「無回答」が多い、アンケートの回答方法、書き方がわからない結果だと考えられるので、次の調査のときは検討必要

【野田座長】

臨床では、ギャンブル依存症の受診が本当に多い。男性の受診多いが、女性のギャンブルはどうか。パチンコは、女性もしている様子が見られるが、表面化しにくいのか。男性のほうが女性よりはまりやすさがあるのか。

【ソウマ構成員】

女性は数字以上に多い。世帯では、女性は家計のお金を自由に使えるが、男性はお小遣いで行っが、足りなくなって、借金をしてというパターンが多いが、家庭では表面化しにくい。

インターネット・ゲームについての調査結果からの意見

【高野構成員】

海外では、インターネットサービス会社を相手取って、訴訟になっている。公判が開始したということが、報道、記事になっている。今後どうなるか気になるところ。利用している側だけでなく、サービスを提供している側の責任も問われる時代になってきている。

スマホのスクロール機能は、スロットと同じで、スクロールすると、いろいろな動画が出てきて、それが報酬につながり、ドーパミンを分泌させるので、ギャンブルと同じ構造であり、それが訴訟となっている。

【滝口構成員】

情報提供ですが、アメリカは、裁判書類が公開されているので、直接アクセスして確認できるので参考までに。

【野田座長】

ネットで依存を形成しようとしている。ギャンブルの YouTube も見ていると、広告など、おすすめの情報が出てくる、ゲームもしていると、どんどんはまっていく情報が出てきて、依存を作るアルゴリズムになっている。若者が、その犠牲になっている。社会全体の問題として対応必要ですね。

依存症全般についての調査結果からの意見

【滝口構成員】

海外のギャンブルサイトは違法・犯罪と言われており、それが、依存症全般に犯罪イメージが強く出ているのではないかと。

依存症の支援対策で、依存症の黄色信号の人たちに支援が必要、という項目がないのは残念である。黄色信号の最初の段階を見分けて、介入するということが、早期発見やオンライン対策を計画に入れてほしい

【小野構成員】

依存症は依存対象のものが、時代でかわる。AI への依存も懸念される。今後の調査では、時代に合わせた、質問項目必要。

【佐古構成員】

クレプトマニアの問題も大きいので、そのことも考えていければと思う。

【森構成員】

家族より、推し活による多額のお金をつぎ込んでいて困っている、という相談を受けた。相談場所がわからない、と言われた。お酒やギャンブルという依存症のカテゴリから、新たな依存ができています。

【木原構成員】

法律相談で、スマホでのギャンブルや推し活の相談が増え、借金問題とともに今後の生活を安定させようとするが、治療や金銭管理に関する相談機関につなげようとしても数か月待ちの状況が多い。借金問題は解決できるが、そのあとの生活再建のための相談の場がなく、すぐにつながる仕組みが必要で、計画策定で検討してほしい。

【野田座長】

これまでメジャーであった依存症が、どんどん減ってきて、違うものにどんどん行ってしまう、という複雑な状況、社会になっている。